

---

(令和7年7月23日掲載)

# 「不安」をプラスに



.....

## 藤田 由紀子 (ふじた・ゆきこ)

1955 (昭和 30) 年生まれ。土佐市在住。  
3歳の時にストマイによる副作用で失聴。  
現在、高知県聴覚障害者協会理事。四国ろうあ連盟相談支援協会会長。  
防災士。  
「すりくろ」のグループ名で、きこえないことについてユーチューブ配  
信している3人の子どもとともに、住みやすい社会を旨として活動中。

.....

神戸で行われた阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼する1.17のつどいに参加した時、慰霊モニュメントに刻まれた母親の名前を指でなぞり、そっと手を合わせていた友人夫婦を見て熱いものがこみあげてきた。あの大地震が発生した1995年1月17日、友人の母も犠牲者の一人になった。自宅が倒壊し家屋の下敷きになったのだ。災害時は情報がすぐにいき届かないのは皆同じだと思うが、きこえない・きこえにくい人にはさらに届かないことが多い。きこえる人たちが当たり前に使っている音声だけでは私たちは周りの情報が得られない。不安、孤独。まだまだきこえないことがどんなことなのかきちんと理解されていないと感じる。

「きこえない人」とひとくくりにはされがちだが手話が言語として認められていなかった時代が最近まであり、手話を使っての学習を受けることができなかつた人や失聴年齢によって獲得言語数に差があるため、伝え方は色々あるということを知ってほしい。

私は全く耳がきこえない。ストレプトマイシンによる副作用で3歳で失聴。コミュニケーションが取りにくく生きづらさを抱えたまま大人になった。結婚し、子どもと川で遊んでいた時、突然今までに感じたことがない「不安」が押し寄せてきた。今、子供たちが溺れてしまったらとっさに動けるか？救急車を呼ぶ方法は？など、いろいろ考えるとすごく怖くなり、その時に大切なものを守るためには自分に知識が必要だと強く感じた。

その後、仲間と一緒にヘルパー2級の資格を獲得。これは手話を使って介護を受けたいといった利用者の声を聞いてのことである。

県外にはきこえない人のヘルパー派遣があり、同じ障がいがある利用者宅で手話でコミュニケーションを円滑にとりながら介護する。それが理想的だと思ったが、地元では受け入れる職場がなかったため断念。しかし知識を得たおかげで親の介護も比較的楽にこなすことができた。自分が介護される側になった時にもきっと役に立つだろう。

私は手話通訳がつく学習会や講演会にはできるだけ足を運んでいる。目で情報を得ることが力と勇気になり、それが行動力につながっていくからだ。

今後必ず起こるであろう南海トラフ地震に備え3年前には防災士の資格を取得。私の行動は「不安」から。「不安」だから知りたい、知識を得たい。知ることは減災にもつながると思う。また、自分の自信の源になる。

現在、女性防災プロジェクトに参加させてもらい他の女性防災士と共に手話通訳を介して意見交換をしたり学習したりしている。同じ土俵に立って行動できる事が私にとって喜びである。当たり前の手話通訳・情報保障など合理的配慮があり、どこでも自由にきこえる人と同じ情報を得られる社会になってほしい。

いろいろな人の後押しで今の自分がある。また自分も他者を後押しできる存在になりたい。「障がいを持っているからできない」のではなく「障がいを持っているからこそできることがある」のだ。